

ナマイキ女スパイ

強制連続絶頂

ストーリー付き

CG

総ページ数74ページ





CHARACTER

【chloe】
クロエ
ブラシA発動

男たちを魅了してやまない女スパイが、
夜に紛れるために用意した衣装へお着替え。
果たして、潜入任務は無事に成功するのだろうか。

B92
W58
H90



「あちゃー……。
「これはちよっとしくじったな……」

スパイとして潜入した敵の海賊船の中、
勢い余って足を踏み入れた宴会場で、
クロエは捕まり拘束されていた。



「まあ、女一人を必死で拘束するような
臆病者にいくら囲まれたところで、
どうってことないけどね」

クロエは船員たちを挑発し隙を作ろうとするも、
相手はそれを笑って受け流し、
クロエの身体にそれぞれ手を伸ばした。





「んっ……なるほどね、さういふことが
したかったんだ。まあ、仕方ないか。
あなたたち、モテなそうだし」

3

下っ

アハハ

アハハ

アハハ

「動けない女の子相手じゃないと、エッチなことなんてできないもんね……っ」

3

服の上から身体を触られながらも、クロエはなおも船員たちを挑発した。

Www

下っ

しかし、それに対して船員たちは手を引っ込めた。そして、リーダーらしき船員がピンク色の淫具を取り出した。





「えっ、なにそれ……
スパイなら、耐えてみるって……!?」

ハッ
ハッ
ハッ

ハッ
ハッ
ハッ

ハッ
ハッ
ハッ

船員たちは手際よくクロエの服をはだけさせ、
露わになった桃色の乳首と陰核の辺りに
淫具を装着させた。



「くっ……これっ、震えて……あんっ……
なんていやらしい……ん、んうんっ……」

2

アハハ

アハハ

アハハ

アハハ

アハハ



「んひ、んんう……クリ、しびれて……っ、
でも、こんな程度の刺激だったら
全然我慢できる……んんう、ぐわんぐわん、んんうっ」

ローターの刺激に耐えるクロエに、
船員はまだ序の口だと笑った。
同時に、淫具による刺激が強くなった。

「あつ……あああつ！ 震え、強く……ううつ！
いきなり……んうつ、ひやあんつ、ふああつ！」

ア

胸と陰部への刺激から逃げることもできず、
拘束された身体を震わせるクローエを見て、
船員たちは好き勝手な言葉を投げかける。

しかし、その中に自分を雇った団長を
馬鹿にする言葉があったことを聞いて、
クローエは表情を引き締めた。





「そ、そうだ……っ、私は、こんなことで
負けるわけには……んっ、んっ、んんんっ……」

2

ムムム

ムムム

ムムム

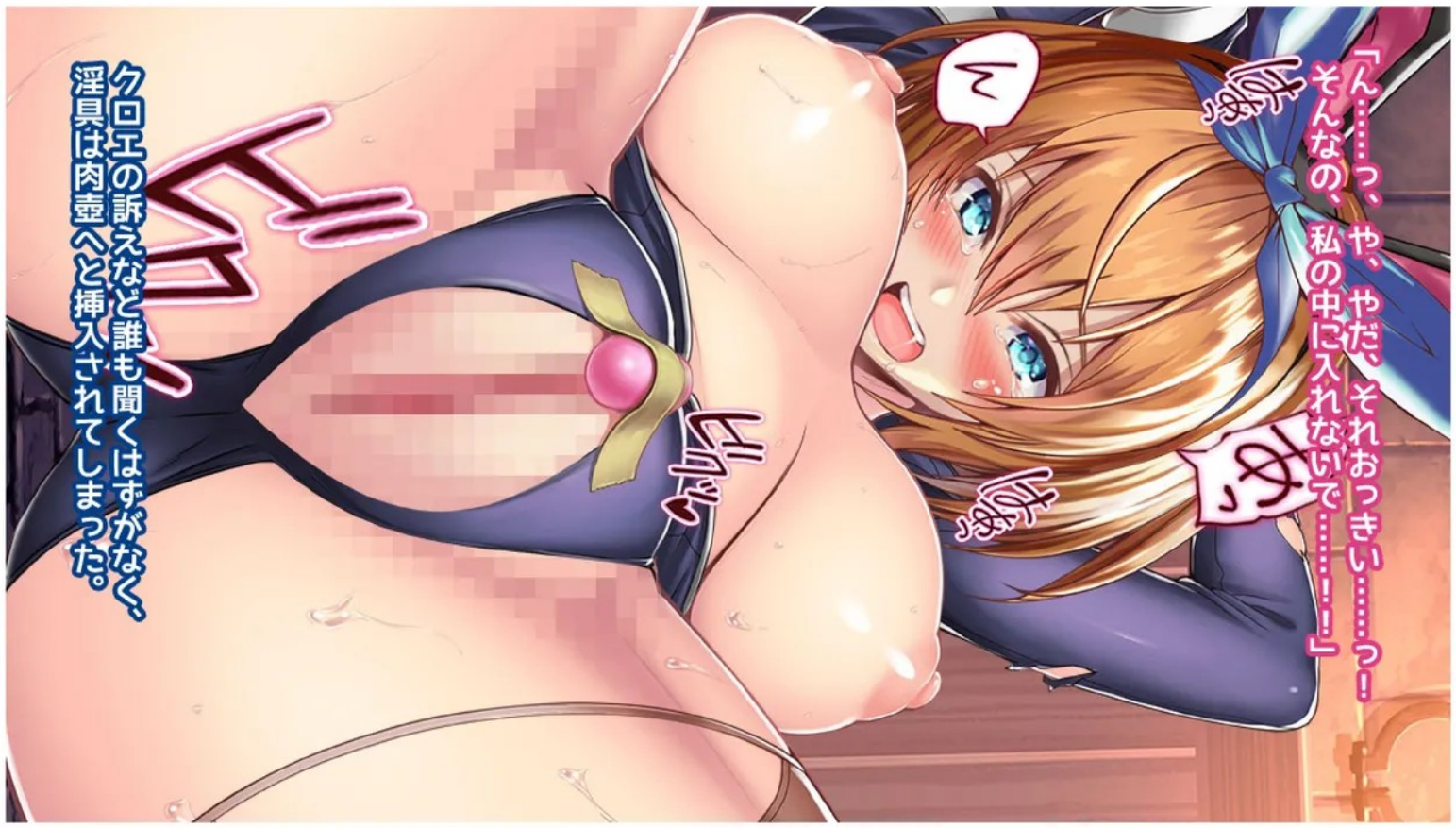
ムムム

「お、オモチャを使つてもこの程度なんて、
やっぱり……あなたたちは情けない……っつ」



必死で虚勢を張るクロエに対し、
船員のひとりが巨大な淫具を持ってきた。
まだ物足りないみたいだなとニヤニヤしながら。

ニヤニヤ



「ん……っ、や、やだ、それおっきい……っ！
そんなの、私の中に入れて……！」

ア

ア

ア

ア

ア

クロエの訴えなど誰も聞くはずがなく
淫具は肉壺へと挿入されてしまった。



あー

「ふっ……太い……っ、中、広がって……うあっ！」「いっ……っばい、色んなところ引つかかるっ……っ」

アッ
アッ



「だめ……っ、だめえ……っ、きもちよく
なっぢや……あつ、だめなのはい……んっ」

「アッ」

遠慮なく膣内を掻き回され、
クローエは快感に身をよじりながらも、
せめて感じていようと声を抑える。



「えっ……腰っ、動いてっ……？
ちっ違っ……っ、これは……んんんっ、
これは……違っの……あんっ……んんんっ、
んんんっ、

んんんっ、
んんんっ、
んんんっ、

もはや感じていることがバレバレなクローエに、
船員たちはセクシーなスパイスーツとそれを
身につけるクローエのことを罵倒する。



「この格好は……ひああ、ああ、
男を誘うためのものでもあるけど……っ！」

「おはっ」

「おはっ」

「アッ」
「アッ」



アッ!
アッ!

「ひっ...あつ、ああんっ!」
なじ中でえ...っ、震え...ううっ、
これ...っ、だめえう!」
ううっ、
ううっ、
ううっ。

あ

あ

ううっ



アッ!
アッ!

「やっ! あっ、ああっ!
激し〜っ、うら〜っ、」

「おはっ!



「め、めスっ...っ? わたし、ただの...くうっ、
めスっ...んっ、ふううっ、んお、おんっ!」

め、めスっ...っ?
め、めスっ...っ?

んお、おんっ!



「ち、ちがう……あ、あつ、んんんらー！
ちがううう……っ、ちがうのさ……っ、
気持ちいいの、とまんないの……っ、っ……」

船員たちの薄汚い野次にも、クロエはすでに
反論できるほどまごもな声を発せていなかった。



「んああ、あああつ、ふん、ん……
ちめえ、気持ちいい……おまんこの中、
うねうねするの、いいの……」

おまんこの中

アッ
アッ
アッ

「奥もお、入口もお、ぜんぶぶるぶるしてえ……
はあはあ……クリトリスにもお、
ぶるぶる伝わってえ……
はあはあはあはあ……」

「はあはあはあはあ……」

クロエの身体から力が抜けていった。

縛られても閉じようとしていた脚は
だしらなく開かれ、口の端からは
漏れた唾液が筋を作っている。





「イク……もう、イク、イっちゃう……っ、
スパイなのに、オモチャでいじめられてえ……
おまんこ落ちちゃううう……っ」

「おまんこ」

「ついで、敗北を口にしたクロエ。
男のひとりがダメ押しとばかりに淫具を
ぶっこんで、腰が浮きあがり始めた。」

「イク」



「ちめえっ、いまぐりぐりされたらあ、えっちなおつゆまで吹き出しちゃうっ……っ！」

「あッ」

「あッ」

アッ

アッ

おのの言葉に反応して、男はからん顔であざむくようになった。



絶頂し、身体を
させるク回。よ。
それと同時に秘部からは潮が噴出し、
薄く色づいた尿が放物線を描いた。

「……」

「……」

「ああ、いやだあ……おしっこが井で出てる……
おしっこしてるとどうなるかな？
誰にも見せたくないの……」
ひいひいっ……」

潮と尿を垂れ流すことに羞恥しつつも、
脱力したクローエは指の一本すら動かさない。
股間の周囲をいんわいに濡らすと、
雌に成り下がっている。





「あ……っ、はあっ……あはは、見られちゃだめな
と……全部見られちゃったあ……」

びしょ

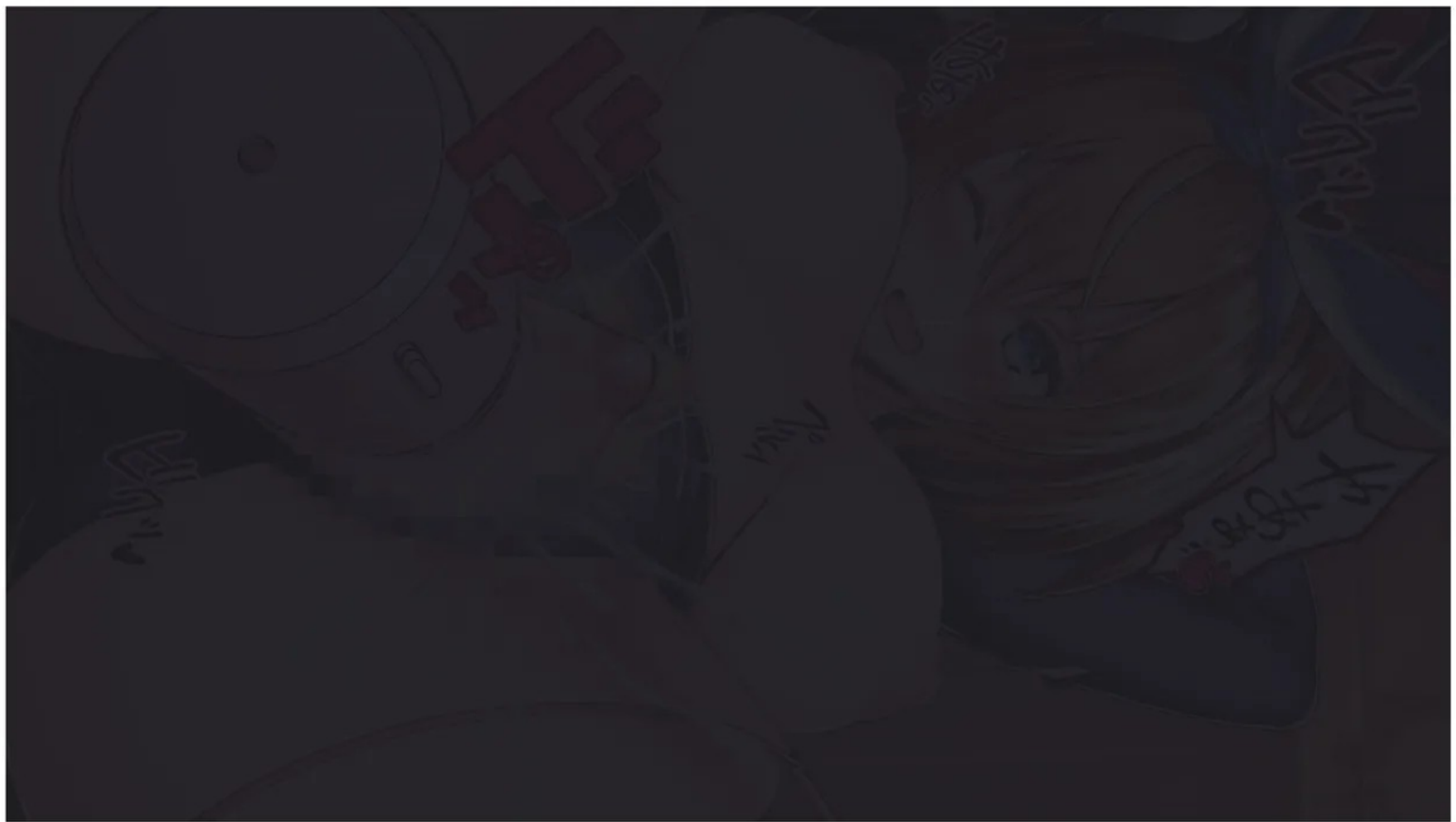
びしょ

びしょ

びしょ

惨めに果てたクローエを下品にはやし立てる
船員たちの中で、
クローエは心も身体も反抗する力を失い
ただだらしない笑みを浮かべた。





「……というわけで、なんとか逃げ帰って
来たって感じなんだけど……」



敵船への潜入任務に就いていた
クロエからの報告によると、
彼女は拘束されて酷い目に遭わされたあと
隙を突いて逃げ帰ってきたという。

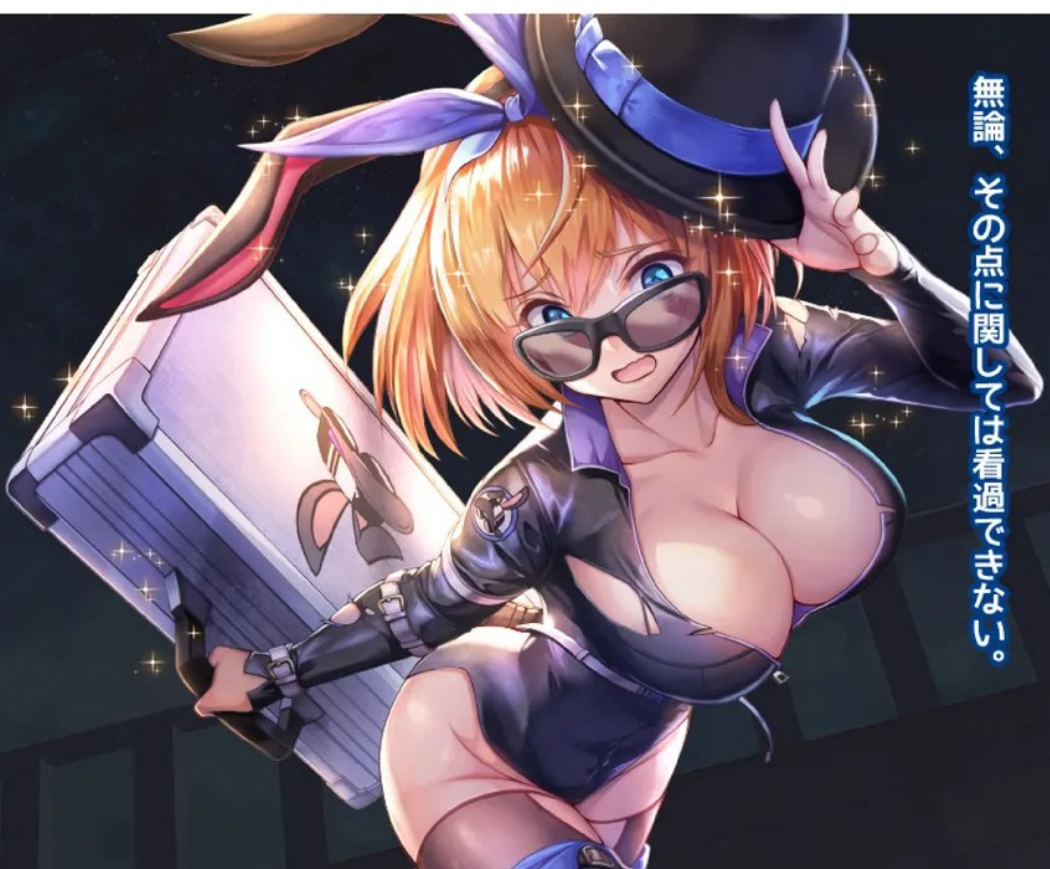
「それで、急いで逃げてきたから……
その、特に成果はないっていうか……」



なんの成果もないこと自体は仕方ない。
帰還できただけでもマシだっただろう。

「うう……でも、帰ってくるだけじゃ……
旅行に行ったわけじゃないんだし……」

無論、その点に関しては看過できない。



特に、拘束されて酷い目に遭ったという点だ。
これは特別な訓練が必要だ。
二度と同じことにならないように。

「特訓って、いつたいなにを……？
なんか、嫌な予感しかないんだけど……」



不安がるクロエの両手に拘束具をはめ、
抵抗できないよう身体の自由を奪った。

「えっと、これで特訓ってことは……拘束された状態から逃げ出させてってこと？」

すぐに否定し、特訓の詳細を告げた。





「でも、それを「」でやる必要なんて……
私はそもそもえっちなことは苦手じゃないし、
あれは油断したせいでああなっただけで……」

特訓は、もう決まったことだ。
クロエの言うことには耳を貸さず、
フロントのファスナーに手をのばす。

ファスナーを下げると、豊満な乳房が
ぶるんと零れ出た。早速、背後から
緊張気味の身体を触っていく。

ドキ.

ドキ.

はぁ

はぁ





「んっ、待って……
後ろから弄られるの恥ずかしい……」

恥ずかしいと言われてもとまらない。
乳首に指を添えながら、
柔らかな胸の形を変えるように揉みしだく。

ドクン

あ

はあ

アッ

アッ

W



「あんっ、んんう……手つきがいやらしい……
わざわざ、乳首触ったままで……ふあ、あっ」

ドクン

ヒクッ♡

あっ

アッ

はあ

ん

「こ、こないやらしく触られても
感じちゃダメなんて……はう、ん、んんう……」

抵抗する意欲が弱いのか、
クロエは愛撫を受け入れ始めている。
これでは特訓の意味が薄れてしまう。

あえて罵ってやるう。
この程度で感じではスパイ失格だと。

ドクン

ヒクッ

あ

ヒクッ

はあ

W



「そんな、スパイ失格……つて……んっ。
べ、別に……このくらいなら、全然動けるし、
感じてるうちに入らないよ……っ」

こちらの言葉に反抗心が湧いたのか、
クロエは虚勢を張るも、その声に喘ぎが混じる
のは抑えられていなかった。

そこで、その虚勢も剥がしてやるため、
ぷりんとしたお尻にペニスを押し当てる。

ドクン

ヒッ

あ

アッ

はあ

ん





「ん……っ、あ、当たってるっ……
団長のおっきいの……
このまま、入れる気……？」

ドクン

あ

はあ

アハハ

ヒッ♡

ん

「わ、私は、入れられても余裕だけど……
いつ入れてくれてもいいくらいで……っ」

なおも虚勢を張ろうとするクロエ。その二番奥まで、一気にペニスを挿入した。

ドクン

あ

はあ

アッ

ん



「い、今のは……っ、驚いたただけだからっ、
急に……っ、奥まで入れられて……っっ」

瞳内を貫かれ大きく身体を
のけ反らせたクロエは、
荒い息を吐きながら言いわけを絞り出す。

そして息を整える暇を与えないように、
ピストンを始める。

はあああ

はっ

やっ





「ん、ああ、ふあ、ああっ、く、んんっ……
動くなら、動くって……ひゃん、あ、ひあっ……」

はああ

は

や

ビッ

パッ
パッ
パッ

フム

パッ
パッ
パッ

「ぞ、それは……っ、そうだけ……
団長が楽しんでるようにしか思えなくて……っ……
わざと色んな角度で突いてくるじ……」

弱点を探るように腰の動きを変えていると、
入口の辺りをカリが擦ったところまでクロエの
腰がなまめかしく跳ねた。

はあぁぁ

はっ

やっ





「んっ、弱点……？
な、なにを言ってる……っ。
いまのは、
ちよっとくすぐったかっただけ……っ！」

クロエはなんとか弱点を隠そうとするも、
甲高い声と溢れる愛液を見ればそこが弱点
なのは一目瞭然だった。

はあぁぁ

はっ

やっ

ビクッ

フムッ

パッパッ

パッパッ



「か、感じて……っ、んうっ、感じてないっ! 私……っ、スパイなんだから……ああっ」

はぁあ

はっ

はっ

はっ

はっ

はっ

はっ

「ぬ、濡れているのは……っ、
あなたのおっぱいでっ、
声は……うっ、反射で、
出てるだけえ……っ！」

弱点を重点的に責められ、身体をいやらしく
反応させながらも、クローエは意外なほど強情に
感じていないと言い張り続ける。



はあぁぁぁ

はっ

はっ

はっ

はっ

はっ

「ひゃ……っ、ううんっ！ 激し……っ、
硬いのジュポジュポって……っ、
んあ、あ、あんっ、ふああんっ……っ！」

「これでも感じていないと言い張るのか。
強く腰を打ちつけながら聞いてやる。」

ビクッ

フムッ

はあぁぁ

はっ

やっ



「違う……っ、違うのお……っ、これは、
これはあ……っ、ああんっ、あ、ああっ！」

頑なに認めようとしないクロエに、
認めたほうが気持ちよくなれると
甘くささやいた。

パ
パ
パ

ビ
ッ

フ
ン

は
あ
あ

は
っ

あ
っ



「み、認めたほうが、気持ちいい……!」

スパイがこの程度で揺れていいのがと嬉しいが、
続けざまに十回やぐ。
クロエと気持ちよくなりたいと。

ハッ
ハッ
ハッ

ヒッ

フッ

はああ

はっ

やっ





「だ、旦那が、ネーローンなぞ……」



はあぁぁぁ

はっ

はっ

んん

んん

んんんん

んんんん

「お、おちんちん、戻ってきたら……んすほすほおれるの、すっからせもちんちん……んー」

「拘束されて……っ、好き勝手ぱんぱんされるの、
いいっ……おまんこ、
すごく気持ちいいのぉ……っ！」

一度タガが外れると、
もはやクロエを縛るものは
なくなつたのか、快感を隠さなければかりか
こちらが言えと言つたことを
素直に口にじ始めた。

はぁぁぁ

はっ

んっ





「ああ、んぐ、はあ、あああつ……
気持ちいい……同いよ「ん、
うっほほ……ん」」

はああ

は

ん

ん

ん

ん

ん



「イク、イクっ！ おまんこイクっ！
あんあんあんっ
……ん、あ、あ、ああっ！」

はぁあ

は

ん

ぽん

ぽん

ぽん

ぽん



「あ……そ、それ……っ、ダメっ、イクっ！
イクイクイクイクっ
……んああああああんっ！」

一際激しい声をあげながら腰を振り膣内を
強く締め付けるクロエの二番奥へ、
ペニスを押し付けて勢いよく射精した。

やあああ……♡

ビクッ♡

はぁっ

アッ

ドッ
ポッ

「あつ……ふあ……んうっ、んんうっ……
きもち、よかつたあ
……はあはあはあはあ……」

行為が終わった後も、クロエは絶頂の余韻に
だらしなく身体力を抜き、快感を隠すことなど
完全に忘れ去っていた。

そんなクロエへと、絶頂までしてしまつようでは
まだまだ特訓が必要だと告げ、ペニスを再び
膣へと押し付ける。

やあああ……♡

はあっ

ビクッ♡





「え……まだ、特訓……？
ぞ、そう言えば……やつ、待って……っ。
まだ身体が……あぁあっ！」

やあぁ……♡

びしょ♡

びしょ

ドッ

びしょ



「つづけるのはいいけど、
せめてもう少し休んでからで……っ！
いませれたら、すぐにイっちゃうから……っ！」

クロエの理由など知ったことではない。
なせなら、これは雇い主が課す特訓なのだから。
朝まで、何度でも付き合わせてやろう。

やあああ……♡

んんん♡

はあっ

んんん

ドクドク

クロエの理由など知ったことではない。
なぜなら、これは雇い主が課す特訓なのだから。
朝まで、何度でも付き合わせてやろう。



